

基調講演

「協議会の役割と機能」

大阪府障害者相談支援アドバイザー 摂津市障害者総合支援センター所長 石井寛人さん

協議会の目的は「障害のある人が普通に暮らせる地域づくり」

協働・・・制度や誰かのせいにするのではなく、全員が自らの課題として考える

一つの事業所、分野だけでできる支援には限界がある。ネットワーク、役割の明確化が必要。

協議会で議論すべきことは地域課題

1. 個別支援では充足されない課題をひろい、蓄積する。社会資源を把握して、それが当事者のニーズに即しているか分析。
2. そこから共通する課題を導き出して地域課題として認定する。(地域課題協議シートを用いて、できるだけ客観的なデータを集めて検討)

➔地域診断と利用者ニーズが根っこにあること、支援者の経験や見立てで導かれるものではなく、誰もが理解、

納得できる根拠が必要。

協議会を見直してみよう

- ・会議の目的、役割、行政と民間の役割が明確か、それぞれの役割を参加者や地域に周知できていますか？
- ・組織が複雑で参加者が迷子になっていませんか？
- ・協議している内容に当事者の思いが反映されていますか？（誰のための協議会か）
- ・地域診断を行い、個別支援から出てきた課題が地域課題として整理され、そのことについて解決するための

協議を行っていますか？

シンポジウム 「地域で支えるネットワークづくり」(要旨)

進行 新崎会長

パネリスト 協議会代表委員5名

新崎会長

障害のある人も差別や偏見なく地域で共に生きるために協議会にどんな支援が求められているか。命を守る、生活を豊かにする、その人らしく生きるという3つの視点からQOL(クオリティオブライフ)を考え、地域生活課題に関する官民連携、住民との協働、ネットワークをどう作るかを、このシンポジウムの中で考えたい。

子供、高齢、障害などすべての人を、支え手側と受け手側とに分けるのではなく、すべての住民が、役割を持ち、支えあい、自分らしく活躍できる地域を育成する、そのための機関として自立支援協議会もある。

「自立」は自分のことは自分です、という「孤立」型ではなく、「相互実現」型自立、自己実現だけではなく、お互いに実現していくことを目指し、自分で出来ることは自分ですが、出来ないことは、誰かの支援を受けてもかけがえのない人生を生き抜くこと。

いろんな人達が助け上手、助けられ上手になっていくために知恵を出し合う、それが協議会。砦と広場を築くこと。障害当事者の思いをしっかりと受け止める。砦(=当事者、関係者のコミュニティ)を高くするだけではなく、広場=共感する仲間が必要。専門職がしっかりと障害者の人権意識を高めながら、当事者が生きやすくするために広場を作っていく、そのために協議会として何が出来るか。

<p>テーマ</p>	<p>障害者も地域共生社会の一員として共に暮らす社会の実現に向けて、協議会に荷 ができるか。今後の協議会に求められるものは。</p>
<p>湯村委員 相談支援センターマーレ 相談支援事業者の代表</p>	<p>支給決定のガイドラインは、協議会と行政が協議して出来た大きな成果のひとつ。協議会の取り組み、成果や課題を外部の人にも伝えていかないといけないと感じた。</p> <p>東大阪市のサービス利用計画作成率は40%。相談支援専門員やヘルパーが足りない。人口が減ってさらに支え手が減っていく。障害者も地域で一緒に暮らしていこうよという理念はいいが、具体的にどうやっていくんだということを感じた。</p> <p>協議会では考えないといけない。</p> <p>今は委託相談、基幹相談ができて、そこに言えば何でも解決してくれるんじゃないかと思われている。乱暴な言い方だが、委託相談は無い方がいい。計画作成も、誰かに手伝ってもらって、自分で考えられる人もいる。サービスに慣れてしまい、家族や自分たちがもともと持っていた力がそがれているのではという心配がある。相談を受ける中で本人、家族から、周りの機関がもう少し丁寧に話をよく聞くこと。たらい回しや、どこか解決するところを探すのではなく、相手の話をちゃんと聞くことで、多くのことが解決できると思う。</p> <p>(今後の協議会活動について)</p> <p>差別解消車座ワークショップで当事者や家族の話を聞くのはお互いを知りたい機会。聞きに来るだけでも、どんどん参加してほしい。自分から発信できない人、声なき声をどう拾って、協議会の中で取り上げるかが課題。</p> <p>学びあいの場として、基幹相談支援センターが主催で、いろいろな研修会が</p>

	<p>開催されている。専門以外のことはよく分からず気遅れするのは誰でも同じ。知る、勉強する、相談先が分かることが大事。もっと多くの人に参加して欲しい。</p>
<p>地村委員 NPO法人 ぱあとなあ代表 当事者中心の会代表</p>	<p>障害者差別解消車座ワークショップでは、当事者や家族の方から、困りごとについて話を聞く。たった2時間でもその人のために何をすればいいのかがわかるような空気になる。まず知ることが大切。</p> <p>福祉サービスが充実していない時代には、足りないところはボランティアや近所の人に手伝ってもらって生活してきた人達がいる。不便でも、たくましく生きていた。福祉サービスが良くも悪くも充実したせいで、今まで自分で一生懸命やって出来ていたことがやれなくなることも。相談支援というのは当事者をいかにエンパワメントしていくかが不可欠で、その人達の手を奪うほどの支援は必要ない。協議会は誰のための場所か、当事者の声が拾えているか、改めて考えたい。</p> <p>(今後の協議会活動について)</p> <p>知らないことに対する不安や関わりづらさは当然あって、声を聴いて知ることから始まる。小学校の授業へ行くと、なんでもストレートに質問される。なんで車椅子に乗っているのか、感覚が分からないってどういうことか。聞かれれば答えるチャンスができて、短時間でも距離はすごく縮まる。大人になるといろんな常識=要らないものが身に付いて、相手のことをストレートに聞けない。当事者側も失礼だ、と怒ってしまうのではなく、もっとオープンにすれば周りの人もどうしたらいいのかが分かる。</p> <p>ワークショップの中で、当事者の困りごとを聞いてこれからは手伝おうと思う、</p>

	<p>という嬉しい言葉があった。昔に比べて近所付き合いも減っているが、地域の大切な部分を取り戻していくために、高齢や児童、色んな方と話し合いを重ねていくことが、結果として住みやすい東大阪を作るのかなと思う。</p>
<p>宮田委員 社会福祉法人若草会理事長 重度障害者等が利用する施設の運営法人代表</p>	<p>人材の確保が大きな課題。事業所としては、利用者のニーズに答えていくことが責務だが、サービスの供給が追い付いていない。人材不足は福祉サービス全体の課題で、外国人労働者の雇用や、大学でも学生が集まらず福祉学科が閉鎖になっている。義務教育の段階から、教育関係者と福祉関係者を交流させ、ネットワークを作り、人材育成の仕組みを考える。子供たちに福祉教育という形で、身近に障害の人と出会える仕組みを市として考えていくことが必要。</p> <p>障害と医療のつながりについて。障害者が医療サービスを受けるには、遠方の病院へ行かないといけない実態がある。特に重度障害や行動障害等があると、点滴を抜いてしまうとか、責任が持てないからと施設職員が24時間付き添ってくださと言われる。例えば市立総合病院を障害者の拠点病院として医療供給体制を考えていけないか。大きなテーマではあるが、今後協議会の中で問題提起したい。</p> <p>(今後の協議会活動について)</p> <p>地域共生社会にむけて、高齢分野が障害分野のことを知るように、障害の方も高齢のことを知らないといけない。障害者も高齢者になってしまうわけで、お互いを知ることが必要。事業者同士が交流を持つこと。他法人や施設に行き、新しいものを取り入れる。お互いに弱いところ、強いところをうまく融合させて</p>

	<p>より良いものにしていく。業務提携のように障害と高齢でお互いに人事交流を通じてお互いが成長できればいいのではないか。</p>
<p>中西委員 株式会社ノーサイド代表 障害児が通う 施設連絡会代表</p>	<p>協議会の中で、入院時のコミュニケーション支援制度を作ったり、支給決定を分かりやすくするガイドラインの作成に取り組んできた。</p> <p>現状の良い点は平成24年に放課後等デイサービスが始まり、学校が終わってから集団生活する場所が増えたこと。2つ目は支援学校ではなく地域の小中学校に通う子供が増えてきたこと。3つ目は子供が障害福祉サービスを利用する際の支給決定基準が明確になったこと。4つ目が大阪府で医療的ケアが必要な重度の障害児に対する通学支援が始まったこと。</p> <p>問題点は、親の介護力が低下したというか、親子の関係が離れて、うまくいかなくなってしまったケース。障害のある子どもばかり来る施設ができて、地域とのつながりが切れた。親が学校の先生、放デイの先生としかつながらなくなった。</p> <p>集団生活の場所ができたことで、日常生活のサポートする人が減り、個別で遊びに行くためのガイドヘルパーの利用や、朝晩の準備をしてくれるヘルパーの利用が減った。日常生活と集団生活は違うので、日常生活のサポートが減ったことは問題。</p> <p>親のレスパイトで利用できる日中活動の場所はあるが、泊まりで利用できるサービスはない。医療的ケア児、重度の知的障害児に対して東大阪では使えるサービスがほとんどない。良い点と問題点があるので、協議会の中でこれからしっかり話をすべきと思う。</p>

	<p>(今後の協議会活動について)</p> <p>東大阪としての方針をきちんと考え、順番を決める。できないのか、やらないのかを明確にして物事に取り組む。なんとなくやっているのは出来ないんじゃないかとやらないのと同じ。その場しのぎでいつか良くなるということはない。具体的に決めていくことが必要。</p>
<p>由井委員 社会福祉法人由寿会理事長 高齢介護施設連絡会 の 代表</p>	<p>高齢機関代表として協議会へ参画することになり、障害のことはよく分からな いという気遅れもあったが、参加してみても重要性が分かった。高齢で介護が必要 な方も、広い意味では障害者、仲間であるということ。障害者も65歳になると、 介護保険を利用することになる。8050問題などに、私たちがどんな形で関 わっていきけるか、考えていかないといけない。</p> <p>地域共生社会では、支援の担い手、例えば高齢事業に関わっている人たちや 地域の人達も障害者児のことをもっと知らなければならない。課題は、高齢の 分野でも共通していて、高齢者も施設ではなく住み慣れた地域で住み続けるため には地域の支えが必要だし、普通に暮らせる地域作りという考え方も同じ。</p> <p>国もこれから共生社会の実現のために色々なことを打ち出してくる。今ある 地域社会の中で、やらなければいけないことがいっぱいある。お互いを知り合う ことが必要。協議会に参画して障害児者の抱えている問題を知ること。もっと知 ってもらえるための取り組みや仕掛けを行政も含めて実践していくことが必要。お 互いの相互理解が必要だし、そのためにはたくさん話をする。今後そういう 機会が作られていくことが第1歩かなと思っている。</p>

(今後の協議会活動について)

第一歩は顔を合わせてお互いを知ること、興味を持ってもらうこと。情報の発信もしていく。例えば車座ワークショップのことも、やっていることを知らない人もいて、情報が届いていないと思う。事業者や団体で関わっている人はとても熱心で、行政の主導が無くても、交流する機会を作ってお互いを知り合い、手をつないでやっていこうという気持ちがある。そこに行政がもっと関わって導いて欲しい。

新崎会長

総括

車座ワークショップなどで、当事者、家族と話し合うことがすごく有効。福祉の人材不足については、調査した根拠（エビデンス）をもとに理論値に変えていくことが必要。支え手が足りない中で、委託相談に解決をまかせるのではなくて、いろんな機関が連携することが必要。

制度が充実することは良いが、行政任せにならないよう、本当の自立ということをもう一度考える。原点に戻ってエンパワメント、本人の力をひきだす伴走型の支援について、当事者のための協議会という視点で考える。

人材不足については、近視眼的に捉えず、子供たちの福祉教育という形で、身近に障害者と出会える仕組みを作っていく。医療と福祉の連携については、重い障害の人がなかなか医療にかかれないという指摘があった。

児童デイサービスの良い点と心配な点。児童デイができたことで親子関係が難しくなり、地域とのつながりが切れてしまったこと、日常のヘルパー利用が減ったことなどが課題。

高齢分野から障害の協議会への参画は不安だったが、お互いの共通点も多く、それぞれの専門性を尊重しながら助け上手、助けられ上手になること、お互いに教えあい、専門でないところは学びあうという相互理解が大事だという話。

自分からSOSを発信しにくい人に対する支援をどうするか。いま困っていることだけでなく、これからの地域を作る上では、子供たちに福祉とか障害のことを正しく理解してもらい、将来の人材を作っていくこと。

障害と高齢の分野でお互いの知らない部分を教えあいながら、強みを活かしてやっていくために連携や交流が必要。その仕組みを協議会でやっていくべき。

協議会では方針を決める、優先順位をつける、やることやらないことを決めることが重要。無関心が一番問題、最初は「参与」、車座ワークショップに行ってみるとか、シンポジウムを聞くことから始まり、次にいろんな活動に「参加」して、最終的には協議会としていろんな実践に「参画」できるような仕組み作りが大切。

協議会が主体的に動く、それに行政がしっかりとコミットして役割分担していくことが必要。